

オオタナゴの二枚貝利用特性

萩原富司

土浦の自然を守る会, (一財) 地球・人間環境フォーラム

タナゴ類は婚姻色が美しく生きた二枚貝を唯一の産卵基質として利用しており, 婚姻色の合目的性(メスの誘引, 種認識)や貝の利用特性(貝の選択性, 産卵管の長さ, 産卵位置, 卵の形,)に関心が注がれてきた。

オオタナゴ *Acheilognathus macropterus* は 2000 年ごろから霞ヶ浦の小野川河口で確認され, 以後この周辺において再生産と多数の生息数が確認されている(諸澤・藤沢, 2007)。オオタナゴの成魚が真珠養殖場の近隣に多く生息し, そこから離れるにつれて個体数が減少する(萩原ほか, 2017) こと, さらに近隣で稚魚や若魚が採集されている(山本ほか, 2023) ことから, 本種は真珠養殖場で使用されている真珠貝ヒレイケチョウガイ交雑種 *Sinohyriopsis* sp. (Shirai et al., 2010) のみに産卵し, 霞ヶ浦に分布するタテボシガイやヌマガイを産卵基質として利用していない可能性が示唆されている。

そこでオオタナゴによる二枚貝の選択性を調べるため, 霞ヶ浦から採取したヌマガイ, タテボシガイ並びにヒレイケチョウガイ交雑種からのタナゴ類の浮出実験を行うとともにオオタナゴ産卵期のヒレイケチョウガイ交雑種の解剖を行い, 貝内の卵の数と位置を調べた結果を報告する。

タナゴ類の産卵期に採集したタテボシガイ 580 個体およびヌマガイ 11 個体からは, タイリクバラタナゴ 182 個体, カネヒラ 9 個体, アカヒレタビラ 12 個体, オオタナゴ 10 個体が浮出した。一方, ヒレイケチョウガイ交雑種 24 個体からは 774 個体のオオタナゴが浮出し, その他のタナゴ類は認められなかった。

また, ヒレイケチョウガイ交雑種 23 個体からは, オオタナゴの卵・胚 139 個とタイリクバラタナゴの卵・胚 34 個が確認された。オオタナゴの産卵位置は, 外鰓 35 個, 外鰓上腔 61 個, 内鰓 10 個, 内鰓上腔 33 個であった。タイリクバラタナゴの卵・胚は鰓腔からは確認されなかった。

オオタナゴは, 霞ヶ浦に生息する野生の貝類のうち, タテボシガイ(利用率 10/580)およびヌマガイ(利用率 0/11)をほとんど利用していなかった。一方で, 産卵基質としてはヒレイケチョウガイ交雑種の利用が著しく高かった(利用率 774/24)。

さらに, オオタナゴのヒレイケチョウガイ交雑種における産卵部位は, 鰓(卵・胚 45 個)よりも鰓上腔(卵・胚 94 個)で多かった。